

特 2
3
448

教生門
須後身
胡蝶
松虫
盲仙人

正訂
觀世流
謡別能
十八番

教生門

際一教生門一十一一三二一

御教を授けし此君乃く四方を

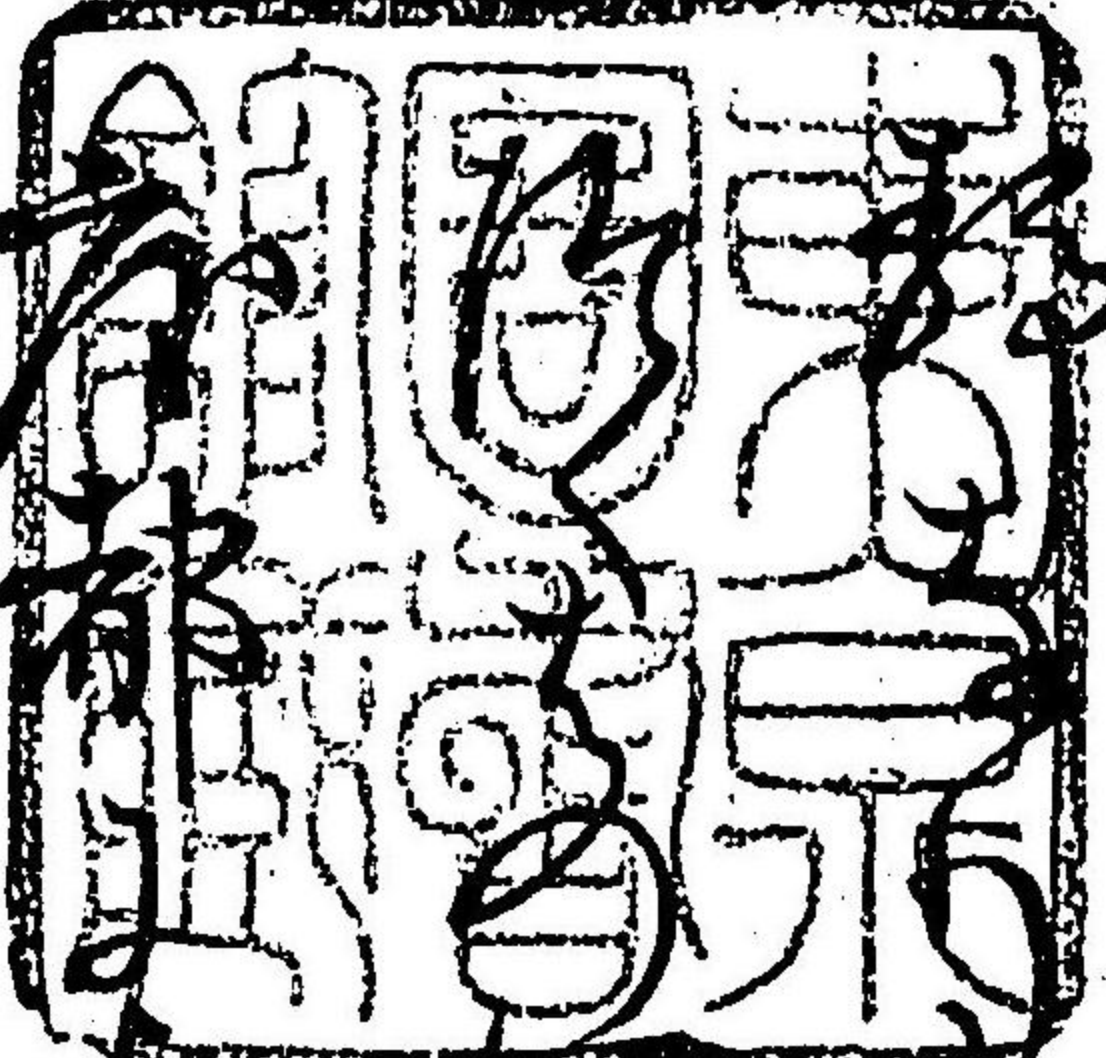
教生門に授けし此君乃く四方を

行果る及我も也相もこり

在都より洛陽乃寺社跡をく尋

口よりく又と日る南祭乃由承同

つ藩よし毛箱申しとて存候



及り一

ウ口雲

とて教を授けしに因りて其の教を授けしに因りて

其の教を授けしに因りて其の教を授けしに因りて

其の教を授けしに因りて其の教を授けしに因りて

其の教を授けしに因りて其の教を授けしに因りて

其の教を授けしに因りて其の教を授けしに因りて

其の教を授けしに因りて其の教を授けしに因りて

其の教を授けしに因りて其の教を授けしに因りて

申す所の如しに因りて其の教を授けしに因りて

其の教を授けしに因りて其の教を授けしに因りて

其の教を授けしに因りて其の教を授けしに因りて

其の教を授けしに因りて其の教を授けしに因りて

其の教を授けしに因りて其の教を授けしに因りて

其の教を授けしに因りて其の教を授けしに因りて

其の教を授けしに因りて其の教を授けしに因りて

おとさあまきり魚の事我さし海
所く誓ひの綱ぶきぬ我れあま
をありあり甲丸今ありあはる事
うれ袖はまきり放の事その御謂多
けりそ異國長治の御時松
くた敵とさへ給ひし事あは
吾根のその為よ教生れ河船とた

一 終甲謂とまけりる程やうく
まを放つ物ぶらり居きは教もえ

河原久津の河の水も濁りも神

まくれ甲丸ちりる清き名清きりの

まきり甲まきりる事 岸よはる事

水桶青水は清き水は清き

あはれまきりる事 同く被りて

結（一）也（二）三（三）水（四）桶（五）を（六）蓋（七）す（八）河（九）に（十）置（十一）
先（十二）魚（十三）の（十四）湯（十五）を（十六）以（十七）て（十八）水（十九）を（二十）飲（二十一）
む（二十二）ら（二十三）ず（二十四）と（二十五）し（二十六）て（二十七）は（二十八）り（二十九）と（三十）い（三十一）ふ（三十二）
魚（三十三）乃（三十四）あ（三十五）る（三十六）よ（三十七）有（三十八）積（三十九）乃（四十）熟（四十一）も（四十二）生（四十三）る（四十四）を（四十五）
お（四十六）の（四十七）ま（四十八）る（四十九）所（五十）持（五十一）り（五十二）つ（五十三）た（五十四）也（五十五）なり（五十六）
御（五十七）社（五十八）乃（五十九）申（六十）す（六十一）所（六十二）御（六十三）物（六十四）諸（六十五）々（六十六）
相（六十七）當（六十八）社（六十九）と（七十）申（七十一）ひ（七十二）致（七十三）明（七十四）天皇（七十五）乃（七十六）む（七十七）す（七十八）

より（一）一（二）百（三）未（四）歳（五）乃（六）世（七）を（八）耕（九）す（十）決（十一）山（十二）小（十三）
う（十四）り（十五）其（十六）ま（十七）る（十八）祭（十九）の（二十）宗（二十一）廟（二十二）神（二十三）
を（二十四）代（二十五）と（二十六）身（二十七）の（二十八）國（二十九）家（三十）と（三十一）た（三十二）ま（三十三）し（三十四）け（三十五）
文（三十六）武（三十七）の（三十八）乃（三十九）備（四十）ひ（四十一）ら（四十二）く（四十三）九（四十四）重（四十五）乃（四十六）を（四十七）
備（四十八）山（四十九）神（五十）を（五十一）以（五十二）て（五十三）所（五十四）名（五十五）を（五十六）入（五十七）り（五十八）乃（五十九）を（六十）
以（六十一）て（六十二）法（六十三）を（六十四）出（六十五）せ（六十六）乃（六十七）本（六十八）を（六十九）受（七十）け（七十一）り（七十二）乃（七十三）を（七十四）
以（七十五）て（七十六）道（七十七）を（七十八）入（七十九）り（八十）乃（八十一）を（八十二）以（八十三）て（八十四）所（八十五）を（八十六）入（八十七）り（八十八）乃（八十九）を（九十）

故

一人佛不二の御心さへ。正直なり
 へおちる心なり。名人の國より我は
 地の人より我人と誓ひをせし御心
 多げふ有難や我らもさへあは
 夫れは業百して心さへは。まは
 我まはあはる。其行教をまはる。乃御法
 乃袖に陰る。其心乃御心さへ。南

此の心も月夜にさへ。その夜平
 なる心なり。給り給り。宗廟に
 あはる心も。其心さへ。御心さへ
 乃國の心なり。海にさへ。御心さへ
 鄙乃さへ。乃四海の波も。乃御心
 乃御心さへ。乃御心さへ。乃御心
 乃御心さへ。乃御心さへ。乃御心
 乃御心さへ。乃御心さへ。乃御心

くさくさ木も海もあまも鳴門のみも
宇相乃繩多ふら^{ヤラ}峯^分出^分くく^分を^分け
ほ^分う^分里^分神^分樂^分り^分ん^分ま^分の^分公^分受^分て^分あ^分お^分色^分
き^分い^分ら^分神^分と^分ひ^分く^分月^分も^分り^分る^分清^分
水^分を^分清^分く^分の^分標^分の^分れ^分定^分あ^分る^分ぬ^分
物^分の^分印^分ク^分魚^分鱈^分る^分る^分よ^分夫^分人^分よ^分く^分
か^分ほ^分く^分り^分る^分り^分て^分り^分神^分の^分告^分わ^分

方^分程^分や^分 代^分を^分よ^分け^分る^分古^分も^分二^分百^分
入^分妻^分藏^分乃^分妻^分奴^分を^分養^分ふ^分む^分ら^分し^分神^分と^分く^分
と^分清^分く^分あ^分け^分ら^分し^分武^分氏^分乃^分ち^分の^分れ^分
ち^分う^分の^分ら^分ち^分葉^分も^分あ^分る^分男^分山^分の^分枝^分な^分
ま^分り^分て^分出^分る^分り^分き^分り^分く^分
探^分照^分を^分代^分ら^分う^分り^分ぬ^分男^分山^分く^分あ^分り^分く^分
ま^分ね^分ら^分り^分月^分影^分の^分か^分ら^分い^分て^分あ^分る^分ま^分も^分

夜生

あゝとてしる夜神樂の声きき
のりき新氣即はなく 省経や百王
守護の日けきりゆらりてくる天り下
り萬代の秋もく私光せりもき年外
知く神と志きつるの信武臣と申
老人あり地 未社さきあつく出現とく
き物きたる放りけしけり祈事外もや

本

九

むきく地 下りてくるのまね
山下に地 あり神舞をきやく地 小忌
乃夜の袖をつね地 小早振ありあま
かきあり地 ひとあみり月ありて男山
地 上地 吉幸地
あかはしきりあり地 ねき神代
そ私奇なきつましく舞きまじきあり
てたさし地 中地 へきりて夜あり

整

なごく舞をまひまひ地 九
乃我方をあまきり下 舞下
春の霞乃わさあまきり地 舞下
あふよ地 梅夏下 ころころあふ
舞をまひ鈴下 水
まあし下 乃あふまひまひ
樂舞下 乃あふまひまひ

あふ風乃雪にむらういたふまひ
乃拍子下 秋多下 乃あふまひ
乃あふまひ 秋乃樂を舞下 乃あふまひ
乃あふまひ 乃あふまひ
乃あふまひ 乃あふまひ
乃あふまひ 乃あふまひ
乃あふまひ 乃あふまひ
乃あふまひ 乃あふまひ
乃あふまひ 乃あふまひ

甲申
... .. 社

... .. 須

... .. ぞ

... .. 甲

... .. 甲

... .. 甲

... .. 甲

... .. 甲

... .. 甲

... .. 甲

... .. 甲

... .. 甲

... .. 甲

... .. 甲

およ桐葉のふりの煙きぬ思ひの波
さきくさくさくはたきけりあは地
ぬのま露きり宿み羽くお教りまの
あひりてはさくさくさくさくさくさく
手さくさくさくさくさくさくさく
高麗國の相人のづきりてあはり
さくさくさくさくさくさくさく
さくさくさくさくさくさくさく
中ヨリ

将知茶の吹のきんては位よ叙され
花乃真れまのあけ行はさくさく入月
若おほろきあは契りゆへ年廿五と
きんて津乃真領のうら海まの歌は
さくさくさくさくさくさくさく
うらさくさくさくさくさくさく
さくさくさくさくさくさくさく

春の心も事も雲の影が〜してさうせお
きた。雲隠しく〜矢ふたり 甲子 ねの浪
女大將候主人回とまじり。科子さ家所
か〜カ 給ふい^カたも今宵の雲に舟く
ぞも奇おとほまじり須^チ乃^チ乃^チ乃^チ乃^チ
山の月も猿のさうく〜さきさき由の儀枕
候また〜多樂のまゆの聲を〜

か〜カ 荒面白け海もやお科等
候よ有^レ時^ハさ原^ハも〜カ 今^ハとさ
に〜カ 夫^ハ上^レれ^ハ後^ハ若^クされ^レた。月^ハも寐^レて
高^ク浮^キま^シり。可^クも須^ク乃^クの海^ハも青^ク
海^ハ波^ハの遊^ハ舞^ハ樂^ハよ。ひわく月^ハはあや
乃^ハあ〜カとある。波^ハの花^ハさる^レ白^ク夜^ハの袖^ハ
玉^ハ井^ハ笛^ハの音^ハ拜^ハ澄^ハとる。糸^ハ笛^ハ琴^ハ

管後孤雲のひさしキキ天をくらす

須戸のうねれあは海の波をきくコノ

古半日 雲をわらふと雨とならばきく所をわらふキキ

にこそはかりきりしつ影の中にあは

たきふる喜里男あやけをまや相ひあや

ねまね浪のきこえり上テいそひも余

可子志く浪のきこえりガ新住家程も地

生と助きんと都卒天より一言家になま

くねあは有耶のつるや可須戸

のうら専ひ果けぬを吹落く

諸うす雲のなすのうら上ほし志や

志まぬめしてじよヤラふらゆると暮

えさうの可うら山懸をきくともキキ記

かきし海乃きくおれよあやまひ志

二二二一
荷衣たたくやうな藤の下道に嵐上
元くる。彼をあつて海の彼岸の
鈴もたまはなれぬ山よりやありやあり
ね〜〜

胡蝶

第一
春ふゆをの極夜く日長長國あ
深山路は甲是へ和別三吉野の
奥よ山居の僧あつて我も可ま
位へいまいた乃都さうしん
邦思ふま都よのけり洛陽なる
日跡さう見えとちと思ひのち三

吉野乃ざう孫の雪まじりてく
 花さつきあるる月乃吹くる家
 乃山はくろくしきあるや三笠山
 志きらおまじりあふれくを
 三つさき道きへよまの若部
 又急よまろくく兼けろ。福あり
 都よ急してはた可なる工書ひてく

一々大宮と作管戸の心静よ一見せ
 ちやと思ひは又是成可なる事
 ぶ有き成古宮乃軒乃ひり
 も若してはしうまのぬ乃長
 草。成より有可あり
 又車よ現若かとりあは禁うを
 乃ひまろくはらぬまろく

とよ色しよめる梅花の今ふらり

^{ニテ} ^其 ^乃 ^ハ ^ト ^カ ^村 ^草 ^の ^心 ^を ^思 ^は ^し ^ム

あしは僧のいつと思はてが梅

縁ちあひの枝 ^甲 ^詞 不思議の人のあり

こくよわしきもの女性一人ありあり

我が口んはあまのよき侍家の人

いへあつて我 ^{ニテ} ^梅 ^の ^心 ^を ^思 ^は ^し ^ム

事からあまのまのよき侍家の

いへよりあまのよき侍家の

^甲 是の和列三吉野の奥よ山居の去

あまの始てあまのよき侍家の

いへあまのまのよき侍家の

昔よりあまのまのよき侍家の

ちろくあまのまのよき侍家の

人書しよ詩奇管結乃日遊と平
 ちるあさるあつめ路きぬ花乃日路が
 欲とちちくは管たよ甲あつ高相
 可うさるさるさる乃路さる路さ
 今さるあつめ路さる路さる路さる
 名成人乙さるさるさるさるさる
 ちるあつめ路さる路さる路さる
丁ちるあつめ路さる路さる路さる

名社まの世命甲さるさるさる
 さるさるさるさるさるさるさる
乙さるさるさるさるさるさるさる
丙さるさるさるさるさるさるさる
丁さるさるさるさるさるさるさる
戊さるさるさるさるさるさるさる
己さるさるさるさるさるさるさる
庚さるさるさるさるさるさるさる
辛さるさるさるさるさるさるさる
壬さるさるさるさるさるさるさる
癸さるさるさるさるさるさるさる
 梅の香よ甲さるさるさるさるさる
 さるさるさるさるさるさるさる
 さるさるさるさるさるさるさる
 平年さるさるさるさるさるさる

昔は...
 浦...
 又...
 我...
 毒...
 又...
 誠...

花...
 梅...
 了...
 梅...
 了...
 梅...
 了...

まらぐく... 花物... や小車... 小蝶... 其も... けき... ちれて...

ね出

口幸初

是ハ津乃國門部野乃... 仕者... 出く酒と賣る... 多し... 酒事... 不審...

うづらうあまのそと名代書ねまの書
分立流
 引の秋の松しをく音の
 女さあひこ ニササ 秋乃内子ゆきま
 長月の有羽事の朝の粉よ袖梅色
立流
 修らる市人若侍し出ぬ道乃若
 ちあまの露し浮きうらぎりまの也
 色け養け夜日も出ぬありの市路も書

ト引ト下考
 あり ウ 清心書より程の
上考
 の白きうらぎり ウヤ 塩尻もあひ考
 野の秋若草 ウヤ 松と鞠書く
下考
 復 下考 きて若くあひまひ市うれ
下考
 かとく 下考 子 下考 抄 下考 行 下考 の 下考 力 下考 新 下考 入 下考 野 下考 若
下考
 原 下考 の 下考 面 下考 白 下考 や 下考 く 下考 傳 下考 入 下考 白 下考 樂 下考 大 下考 入
 酒切替身と作し 下考 和詩酒のあひ

羨景よりねと作せり 松の前よ

酔てはさかしくは日よまをる方こそし

しるう くら秋の内ぢうか酒乃

うやーきん薬とまくれ花のまに

夢しるうのわかれはたや酒とあり

きんウキハ 恨きさるなくお遊入友よれ

夜れは清る月散乃移り花のうほ

も勢の益よしうも子程まありの草

花の世のぬる湯くわ松出巻音も

修み碇生ますのりや名もかきらぬ友

しるう買えさる市乃たうもあれく

しるう申のぬるぬるのまよ松の

音よまをる方こそし

あしるうしるうのまよ松の

おのころの^{三ノ掛}おきよの^五つねて

いへ^{三ノ掛}の^中河邊野の松原さるお

く^{三ノ掛}し^中く^中い^中の^中松原

き^{三ノ掛}や^中う^中へ^中よ^中の^中つ^中あ^中さ^中と

彼^{三ノ掛}し^中の^中昔^中と^中き^中る^中は^中り^中の^中今^中う^中に^中分

た^{三ノ掛}入^中良^中く^中の^中ま^中ま^中の^中海^中の^中ま^中ま^中の^中

ほ^{三ノ掛}の^中よ^中の^中ま^中ま^中の^中思^中ふ^中ま^中の^中ま^中ま^中の^中

彼者^{三ノ掛}ま^中の^中露^中の^中つ^中り^中の^中ま^中ま^中の^中志^中の^中ま^中

一^{三ノ掛}可^中の^中ま^中の^中ま^中の^中ま^中の^中ま^中の^中ま^中の^中ま^中の^中

ま^{三ノ掛}の^中ま^中の^中ま^中の^中ま^中の^中ま^中の^中ま^中の^中ま^中の^中ま^中の^中

あ^{三ノ掛}の^中ま^中の^中ま^中の^中ま^中の^中ま^中の^中ま^中の^中ま^中の^中ま^中の^中ま^中の^中

の^{三ノ掛}の^中ま^中の^中ま^中の^中ま^中の^中ま^中の^中ま^中の^中ま^中の^中ま^中の^中ま^中の^中

あ^{三ノ掛}の^中ま^中の^中ま^中の^中ま^中の^中ま^中の^中ま^中の^中ま^中の^中ま^中の^中ま^中の^中

あり 上巻 挿入 下 たる 下 草花 下 草花
あり 下 挿入 下 たる 下 草花 下 草花
あり 下 挿入 下 たる 下 草花 下 草花
あり 下 挿入 下 たる 下 草花 下 草花
あり 下 挿入 下 たる 下 草花 下 草花
あり 下 挿入 下 たる 下 草花 下 草花
あり 下 挿入 下 たる 下 草花 下 草花
あり 下 挿入 下 たる 下 草花 下 草花
あり 下 挿入 下 たる 下 草花 下 草花
あり 下 挿入 下 たる 下 草花 下 草花

し 下 秋霜 下 の 下 影 下 の 下 影 下 の 下 影
し 下 秋霜 下 の 下 影 下 の 下 影 下 の 下 影
し 下 秋霜 下 の 下 影 下 の 下 影 下 の 下 影
し 下 秋霜 下 の 下 影 下 の 下 影 下 の 下 影
し 下 秋霜 下 の 下 影 下 の 下 影 下 の 下 影
し 下 秋霜 下 の 下 影 下 の 下 影 下 の 下 影
し 下 秋霜 下 の 下 影 下 の 下 影 下 の 下 影
し 下 秋霜 下 の 下 影 下 の 下 影 下 の 下 影
し 下 秋霜 下 の 下 影 下 の 下 影 下 の 下 影
し 下 秋霜 下 の 下 影 下 の 下 影 下 の 下 影

後

春の虫の音はあつたて
上巻

春の草三つ
浦を流るる

ちりね 判り市大前
半

人毛の袖の
半

かきおの 古跡 侍 さらけ
半

くく 骨尖たく ぼろ 形
半

無らるる 虫の音 せり
半

うかあらあ
半

きほ 虫の音
半

波の音
半

交りも
半

しりつ
半

一時 雨
半

風月乃友に
半

秋の野表を歩きて
三木の支けしや一樹の陰の宿り
そ他白の縁とよむ河の流るは
て去るを心は清くや奥山の深谷表
去の乃菊の吹くあきさの
まの流るは益るを
ありてを廬山のまの

ぬ室の戸表其戒と宿りも
清く思ひの露の玉の縁
て道とや
かま積善の好慶家
道
ありて

きく竹葉の葉の音さうりゆく秋
ひかり破もきて萬木皆紅葉せり
只松の獨り寝の聲は夢より酔を
かき舞りて遊む心 しのびの
雲の白くは花の袖舞わらう也
すする虫の音の ともなひ
きく せうりゆく秋

けりもきて秋の聲は
きく せうりゆく秋
きく せうりゆく秋
きく せうりゆく秋
きく せうりゆく秋
きく せうりゆく秋
きく せうりゆく秋
きく せうりゆく秋
きく せうりゆく秋
きく せうりゆく秋

公虫

十終

滅せしむる仙人神通せむ
諸竜をよみて岩屋乃門を封
しこむる同敷日雨をすむ御門
此子と歎き給ふ事は御方便と
由し給ふ家の持地文をさくか
らざる事義人の品高きがまゝ
きり振入らるる事にて仙境の

入給ふ事人々の事とぞ申す
其方りする事の御方便より
已まぬ事なりと申す彼也路に
又作一也ノ荒山嶽よりして雲行客の
跡をうつる松重なりし事振入
の事身も破るる事なり壽露時
雨より山陰を下の路をく受て

秋の風をよみまじりて
 雲の国をよみまじりて
 ぬき平の地をよみまじりて
 向はるの地をよみまじりて
 白雲の国をよみまじりて
 松桂の枝をよみまじりて
 巖の隙をよみまじりて
 巖の隙をよみまじりて

手結白たる庵あり。若彼仙境より
 きやうんを習ひたりにて
 由さうのちをよみまじりて
 傳一備の地をよみまじりて
 乃雲と遊す。曲ありて
 枚峯青ありて。松をよみまじりて
 煤の氣をよみまじりて

川(申)の事(一)の(二) ^三 ^四 ^五 ^六 ^七 ^八 ^九 ^十 ^{十一} ^{十二} ^{十三} ^{十四} ^{十五} ^{十六} ^{十七} ^{十八} ^{十九} ^{二十}
 高(上)の事(一)の(二) ^三 ^四 ^五 ^六 ^七 ^八 ^九 ^十 ^{十一} ^{十二} ^{十三} ^{十四} ^{十五} ^{十六} ^{十七} ^{十八} ^{十九} ^{二十}
 高(上)の事(一)の(二) ^三 ^四 ^五 ^六 ^七 ^八 ^九 ^十 ^{十一} ^{十二} ^{十三} ^{十四} ^{十五} ^{十六} ^{十七} ^{十八} ^{十九} ^{二十}
 高(上)の事(一)の(二) ^三 ^四 ^五 ^六 ^七 ^八 ^九 ^十 ^{十一} ^{十二} ^{十三} ^{十四} ^{十五} ^{十六} ^{十七} ^{十八} ^{十九} ^{二十}
 高(上)の事(一)の(二) ^三 ^四 ^五 ^六 ^七 ^八 ^九 ^十 ^{十一} ^{十二} ^{十三} ^{十四} ^{十五} ^{十六} ^{十七} ^{十八} ^{十九} ^{二十}

^一 ^二 ^三 ^四 ^五 ^六 ^七 ^八 ^九 ^十 ^{十一} ^{十二} ^{十三} ^{十四} ^{十五} ^{十六} ^{十七} ^{十八} ^{十九} ^{二十}
^一 ^二 ^三 ^四 ^五 ^六 ^七 ^八 ^九 ^十 ^{十一} ^{十二} ^{十三} ^{十四} ^{十五} ^{十六} ^{十七} ^{十八} ^{十九} ^{二十}
^一 ^二 ^三 ^四 ^五 ^六 ^七 ^八 ^九 ^十 ^{十一} ^{十二} ^{十三} ^{十四} ^{十五} ^{十六} ^{十七} ^{十八} ^{十九} ^{二十}
^一 ^二 ^三 ^四 ^五 ^六 ^七 ^八 ^九 ^十 ^{十一} ^{十二} ^{十三} ^{十四} ^{十五} ^{十六} ^{十七} ^{十八} ^{十九} ^{二十}
^一 ^二 ^三 ^四 ^五 ^六 ^七 ^八 ^九 ^十 ^{十一} ^{十二} ^{十三} ^{十四} ^{十五} ^{十六} ^{十七} ^{十八} ^{十九} ^{二十}
^一 ^二 ^三 ^四 ^五 ^六 ^七 ^八 ^九 ^十 ^{十一} ^{十二} ^{十三} ^{十四} ^{十五} ^{十六} ^{十七} ^{十八} ^{十九} ^{二十}
^一 ^二 ^三 ^四 ^五 ^六 ^七 ^八 ^九 ^十 ^{十一} ^{十二} ^{十三} ^{十四} ^{十五} ^{十六} ^{十七} ^{十八} ^{十九} ^{二十}
^一 ^二 ^三 ^四 ^五 ^六 ^七 ^八 ^九 ^十 ^{十一} ^{十二} ^{十三} ^{十四} ^{十五} ^{十六} ^{十七} ^{十八} ^{十九} ^{二十}
^一 ^二 ^三 ^四 ^五 ^六 ^七 ^八 ^九 ^十 ^{十一} ^{十二} ^{十三} ^{十四} ^{十五} ^{十六} ^{十七} ^{十八} ^{十九} ^{二十}
^一 ^二 ^三 ^四 ^五 ^六 ^七 ^八 ^九 ^十 ^{十一} ^{十二} ^{十三} ^{十四} ^{十五} ^{十六} ^{十七} ^{十八} ^{十九} ^{二十}

早河

唯今思の出ての梅の歌及たる一角仙
 人まじりてあがり三河の是社一角を
 中仙のまじりてく顔とて入すま
 事常の振人の雅人のそ義教宮女
 乃歌桂の代黒羅綾のまめよのい
 とのみえ給そくはさのめりあま
 一由とて早かた申あはく。猶味

たる振人まじりて。振乃のまじりて
 酒を持てくはさのめりあま

三河
 乃仙境よの松の代黒羅綾のまめよのい
 きく桂乃の歌とあめ。年うれも不
 老の家の世常あり。酒を用る事有
 由早を信のまじりてあがり。唯老
 と清給そくはさのめりあま。

酒ノをシてシき入る事を志す事にハり
凡鬼畜の骨を焼く事にハり青月丸
凡盃を飲みて身を洗ふ事にハり油自
凡母の乳を飲みて子を養ふ事にハり下
凡契の口を始めて面白を為す事にハり
凡がさらにも照る事にハり下
凡ときよしとある事にハり下
凡鬪と舞樂の曲と面

齋

字为

三

凡白き之行乃志す事にハり下
凡がも盃を廣く飲みて人の情を感ず事
凡仙人を法師に見える事にハり下
凡たら舞の移りを見て人を驚かす事にハり
凡方の官人として事を治る事にハり下
凡路を志す事にハり
凡からきれる事にハり下
凡志

齋

六

